

会派「きずな」活動内容



7月24日(京都府綾部市)
水源の里条例の勉強



7月25日(京都府南丹市日吉町森林組合)
現業職員制度の仕組み、現場作業の視察



11月6日(千葉県柏市保健福祉部)
豊四季台プロジェクト
地域包括ケアの取組について



11月26日(秋田県能代市)
バイオマス発電に関する調査研究
3か所の発電施設



11月27日(岩手県雫石町)
バイオマス発電に関する調査研究
3か所の発電施設



11月27日~28日(岩手県紫波町)
オガールプロジェクトに関する調査研究



2月23日(熊本県水俣市)
エコタウン、水俣病歴史考証館、
水俣病関連施設



2月24日(大分県日田市)
日田市バイオマス資源化センター



2月24日(大分県日田市)
グリーン発電大分

月	日		目的	場所	参加者数
6月	16日	県庁健康福祉局にて会派勉強会	包括ケアの中の障害者施策と子ども子育て支援新制度	広島県庁	
9月	29日	会派視察 西城町天樋の公団造林地	日吉町との比較検討のため		
10月	1日	10月2日	中山間地域の諸課題解決勉強会 in 高梁	将来的に中山間地域の課題に特化したセミナー開催準備	高梁市
10月	30日	10月31日	五島議員 第12回地方議会議員研修会参加	公契約条例及び地域包括ケアに関する研修	東京都

また、
上記報告会以外にも、
出張報告会をいたします

おおむね5名以上での集会に、
会派メンバーが伺いますので、
表紙連絡先にご連絡ください。

会派活動報告会 19:00~21:00

- 4/20 敷信地区民ふれあい広場 庄原市板橋町
- 4/22 口和自治振興センター 庄原市口和町向泉
- 4/23 北自治振興センター 庄原市川北町
- 4/25 西城ふれあいセンター 庄原市栗
- 5/ 1 庄原市ふれあいセンター コパリホール 西本町4丁目

【何故、山の木なのか】

会派「きずな」では、庄原市の最大の宝は、広大な面積の84%を占める豊富な森林であると考えています。山で生計を立てていた地域が今では限界集落と呼ばれています。どうにかして地域を元気にできないだろうかと考えた結論が、山の木を活かすことでした。勉強すればするほど、「山は儲からない」という言葉を頻りに聞きました。戦後の植林で山にスギやヒノキが植えられたことは知識として持っていましたが、どうして山から木がでていかないのかという原点に着目して研究をつづけていきました。そうすると、現実問題として、安価な輸入材と競争できないほど、木材を取り巻く環境は弱体化していました。しかし、林業に関わる人たちが全て山を諦めて何もしなくなっているのではないという事例を知ることとなり、希望の灯も見えてきました。

林業機械をヨーロッパから輸入して作業の省力化をしたところ、工務店と協力して地元材を使ったエコハウス（超高気密住宅）の販売で成功した材木屋、村が製材会社を立ち上げ、若い労働者を雇い入れ、家を建てたい人に山の木を直接販売（選べる）し、その材で家を建てる事例など、知恵を出せば、「できない」が「できる」になることを確信してきましたが、この程度では広大な森林の再生なんてできません。もっと、大量に山の木が動く方法はないかと更に研究を続けていると、「チップ発電」というアイデアを知りました。私は、「これだ」って飛びついたのでしたが、これからが苦難の道のりというか、不思議な出会いの連続というか、大袈裟ですが、生涯をかけての仕事と出会ったのです。そして、山の木は伐らないと山は守れないということに気がきました。近頃頻発している山の土砂災害は、山の手入れをしない、山の木を伐らないからです。つまり、太陽の光が入らないから下草も生えず、表土が流出して岩肌状態となっている上に根を張らない木が立っているということです。今から50年ほど前までは、山の木は燃料として各家庭で使われていましたし、家畜を飼っている家では、山の下草を刈って牛のえさなどにしていましたので、山の中は裸足でも歩けるほどだったのです。

【雇用の創出と経済循環】

私たちの考えは、山の中に小規模のチップ発電所を作ることです。小規模とは、500kWから1000kW程度のもので、一般家庭の電気使用量に換算すると、1000世帯から2000世帯を賄える規模です。最初の構想では、売電収入を柱と考えていたのですが、今では廃熱によるお湯の活用をメインに考えています。昨年2月に会派でドイツのユーンデ村とフェルドハイム村を視察に行ったのですが、この2カ所は、新エネルギー村と呼ばれており、家畜の糞尿によるメタンガス発酵の発電とチップボイラーによる

熱電併給が行われていました。ユーンデ村は世界で最初のエネルギー村として、フェルドハイムは世界で最初のエネルギー自立村として有名です。更に今年度は会派で、国内5カ所のバイオマス発電所を視察に行き、我々の考えていることは間違っていないと確信しました。

庄原市の針葉樹の面積は43500haありますが、その3割から4割は荒廃林と言われています。森林組合で教わったのですが、路網を整備してまずは、間伐する。そうすると、間伐後の残し木は優良木となる可能性が高いそうです。そして、伐期を迎えた時には一定の収入が確保されるので、やる気が起きてきます。庄原市が現在、実証実験している「木の駅構想」では、トン3000円の補助、チップ工場の買入れ価格トン3000円と合わせ、地域通貨で6000円の収入となっています。小規模のチップ発電所ができれば市の補助金なくして安定収入、軽トラとチェーンソーがあれば直ぐにでもできる「木の駅」が各地に作られるのではないのでしょうか。

山の木を伐る人、運搬する人、チップ化する人、発電装置を操作する人などの新規雇用が生まれ、それぞれ必要な機器が発生しますし、燃料や修理、飲食、住宅、税金という経済が動きます。独身者が結婚すれば子供も生まれるでしょう。山の中に小さなチップ発電所を作ることで100人程度の人口増を期待できます。住宅には、熱交換で、冷暖房装置が提供され、お湯は無料で使えます。更に余ったお湯は、ハウスの暖房に使えば周年で野菜や果物が栽培できます。また、家畜の糞尿によるメタンガス発電を畜産団地に導入すれば、一気に糞尿問題は解決します。更にさらに、余剰電力は売電することができます。売電価格は、間伐材でのチップ発電は、27年度より2000kW未満は40円、メタンガスによる発電は、39円です。

【庄原に新エネルギー村を】

そんな夢の様なことがドイツでは、新エネルギー村が全国に170カ所程度、メタンガスによる庭先発電は7000カ所以上稼働しています。昨年の会派報告会でドイツの事例を紹介し、庄原市でも小規模の発電所を作りたいと話したところ、「是非とも、実現させてください」との言葉をいただきました。一般質問でも林業政策などをからめて、市として応援できることは応援してくれと何度も提言していますが、バイオマス事業のつまずきもあり、慎重姿勢を崩しません。こんな時だからこそ、山の再生という意味からも、山の中に小規模のチップ発電所、畜産振興からも小規模のメタンガス発電所を作ることを会派「きずな」として提案していきます。

会派「きずな」は、夢を夢で終わらせず、現実のものとしします。